

# 今日の焦点

## ITS（高度道路交通システム）の健全な発展を望む

ITS（高度道路交通システム）は、Intelligent Transport Systemsの略で、世界共通の用語であり、ITを利用して輸送効率の向上、道路交通を快適にすることを旨とした交通システムをいう。わが国では、1985年8月にITS関係5省庁（当時）が、ITSにおける9つの開発分野を中心に研究・開発を推進することを決定している。それ以来すでに24年が経っているわけであるが、長期間に相当な資金がつかまれている。

国際的には、1994年にパリで第1回ITS世界会議が開催され、第2回は翌1995年に横浜で開催された。その後毎年継続して開催されており、日本では2004年に名古屋で第11回が開催された。昨年はニューヨーク、今年はストックホルム、来年は釜山が予定されており、毎回熱心な討議と展示会が行われている。

わが国では、ITSのなかでは、ETC（Electronic Toll Collection）がもっともポピュラーなシステムであり、これは有料道路で料金所で停止することなく、車両と料金所の間で無線で情報を交換し、料金を収受するシステムである。本年1月現在で累計2,500万台以上の車両にETC車載機が取り付けられており、利用率は全国平均で76%を超えている。本年3月下旬からは、新政策として地方の高速道路において、ETCを有する乗用車に限り土日祝日に走り放題1,000円とすることとなった。このためETC搭載の動きが進んでおり、その機器購入の際に助成金を受けられることもありETC搭載車は急速に増加するものと見られる。

VICS（Vehicle Information and

Communication System）は、渋滞情報、工事情報、各種規制情報などを通信・放送メディアによって送信し、カーナビなどの車載装置に文字や図形として表示させるシステムで、現在は全国的に広範囲に普及してきている。また、公共交通バスの運行状況などを示すバスロケーションシステムも各所で導入されている。

政府は2012年に交通事故死亡者数を5千人以下にすることを目標に掲げている。このため、政府は官民連携して世界一安全な道路交通システムの実現を目指し、安全交通支援システム体系を2010年度から実用化するための取組みを開始することとし、これをITS-SAFETY 2010として準備を進めている。この計画を実現するためには、車両が他車両に搭載された機器との無線通信により情報を入手し、必要に応じて運転者に情報提供、注意喚起、警報等を行う車間通信システム、同様のことを車両が路側設備との無線通信によって行う路車間通信システム、歩行者の位置を特定し、車両や道路と無線通信を行う歩行者通信システムなどの開発が必要である。

このITSの計画には、次に示すように数多くのプロジェクトが存在している。見通しの悪い周辺の状況や信号、標識等を、交通インフラから車に伝達しドライバーの安全運転を支援するシステムの安全運転支援システム（DSSS：Driving Safety Support Systems）、道路と車が連携しセンサーや路車間通信技術を駆使して交通事故や渋滞の削減を目指す走行支援道路システム（AHS：

Advanced Cruise-Assist Highway Systems）、自動車のエレクトロニクス技術により車の安全性を格段にたかめるために自動車メーカーが連携して開発している先進安全自動車（ASV：Advanced Safety Vehicle）、ユビキタス・ネットワークによって人と車と道路に関連する情報を融合するユビキタスITS、などである。

ITSは、国の主導する国家プロジェクトであり、必然的に各プロジェクトはそれぞれの省庁のもとで運営されている。DSSSは警察庁、AHSは国土交通省道路局、ASVは国土交通省交通局、ユビキタスITSは総務省が所管している。このほか、国土交通省道路局が所管するスマートウェイ、経済産業省が所管するエネルギーITSなどもあり、全体として各省庁のかなり多くの部局がITSに関係している。

本年2月25日から28日にかけて、東京お台場でITS-SAFETY 2010公開デモンストラーションが行われた。今後この計画は、内閣官房、警視庁、総務省、経済産業省、国土交通省などが中心となって構成される「ITS推進協議会」が主体となり、自動車メーカーをはじめとして数多くの企業や関係団体の協力によって進められる。より安全で輸送効率の良い道路交通システムを、我々は常に望んでおり、そのためにはITS-SAFETY 2010は期待のプロジェクトである。

しかし、これだけ多くの省庁が関与して、果たして開発が順調に進捗していくのであろうか。船頭多くして船山に登ることのないことを切に祈る次第である。